



Number 24

June, 2020

広がりゆくエリオットの世界

窪田 憲子

2019年7月は私にとって思い出深い夏であった。イギリスのレスター大学の主催で3日間にわたって開かれたジョージ・エリオットの生誕200年の記念学会と、スイスのジュネーヴで開催された国際大学女性連盟の創立100周年の記念総会の両方に参加したからである。エリオット関連のイギリスでの行事に参加するのも初めてなら、3年ごとに開催される大学女性連盟の総会への参加も初めであったが、私にはどちらも学ぶことが多い、実り豊かな場になった。

エリオットの記念学会については、昨年のエリオット協会の年次大会で永井容子先生が詳しく報告され、このニューズレターでも奥村真紀先生のご報告があるので、ここでは個人的な印象だけ述べさせていただく。学会の参加者は、もちろん英米が抜きんで多かったのであるが、アフリカのチュニス大学や、ブラジルのパラナの大学からの参加もあり、アジアからは日本の他に、シンガポール、中国からの参加があつて、なかなか国際色豊かであった。

なかでも、中国の杭州師範大学の He Chang 教授と彼女の学生さんによる‘George Eliot in China’と題した発表は、エリオットの中国での受容を知るうえで興味深かった。中国においては、まず、20世紀初頭にアメリカ人の宣教師によりジョージ・エリオットが紹介されたという。その後、イギリスのブルームズベリ・グループとも親交があつた詩人の Xu Zhimo (徐志摩 1897–1931) が中心になり、1920年代に Crescent Moon Society (新月社) という文学運動が生まれ、そのメンバーだった Liang Shiqui によって1932年に『サイラス・マーナー』の翻訳が出版されたということであった。ブルームズベリ・グループと中国との関係について、私がそれまで知っていたことは、Crescent Moon Society が、ヴァージニア・ウルフなどのブルームズベリ・グループを範とした文学グループであることや、ウルフの甥のジュリアン・ベル(姉のヴァネッサの息子)が20代の若さで中国に渡り、武漢大学で英文学を教えていたこと、さらにジュリアンが、彼を招聘してくれた大学の学部長の妻(短編作家の Ling Shuhua。夫とともに中国のセレブであった)と恋仲になったこと程度であった。そのため、Crescent Moon Society のメンバーによってジョージ・エリオットの作品が翻訳されたということは、私には初耳であり、エリオットの中国における受容という He Chang 教授の発表の中で、突然ブルームズベリ・グループの名前を耳にして、とても驚いたのであった。(ジュリアンと Ling Shuhua の恋愛を通して、ブルームズベリ・グループと中国のことを扱ったパトリシア・ロレンスの *Lily Briscoe's Chinese Eyes: Bloomsbury, Modernism, and China* を帰国後に読み直したが、そこでも Liang Shiqui のことは、ごく簡単にしか触れられていなかった)。

He Chang 教授の発表で、もう一つ興味深い点が、中国において *Felix Holt* や *Daniel Deronda* は、その思想的なことが理由で長い間無視されていたという指摘であった。ここで思い出されたのが、2003年にモスクワで行われたヴァージニア・ウルフ学会に参加したとき、ロシアの学者が、『ダロウェイ夫人』について述べた発言であった。彼女が言うには、ソ連においては、ヴァージニア・ウルフの作品は、政治的にブルジョアジーのものであるとされ、ロシア語の翻訳を出版することなど、1970年代(!)まで考えられなかった、というのであった。中国とソ連という国において、政治が文学にこのような形で介入することがあつたのだと改めて知らされたのであった。

レスターの学会から5日して、スイスのジュネーヴで大学女性連盟の100周年記念総会が開催され、加盟国61か国のうち50か国から約400名近い人々の参加があつた。ネルソン・マンデラのお孫さんの基調講演から始まり、5日間ずっとプログラムが組まれていた。

翻ってみると、エリオットが若かった時に、大学が女性に門戸を開ざしていたことは言うに及ばず、死去した1880年においても、イギリスでの女性の大学教育は、始まったばかりといってよい状態であった。ケンブリッジでは、女子のコレッジの Girton College (設立に携わった Barbara Bodichon はエリオットの親友) と Newnham College は設立されて約10年経っていたが、それ以外では、オクスフォード大学においても、Somerville College がその前年に発足したばかりであったのだ。大学教育を受けた世界の女性たちの団体の100周年記念は、エリオットの時代からの女性の高等教育の足跡を考えさせられるものにもなった。

ところで、私にはこのジュネーヴの滞在でぜひ行ってみたい場所が2つあった。メアリ・シェリーがそこで『フランケンシュタイン』の構想を練ったというディオダティ荘と、ジョージ・エリオットが滞在していた住居である。ジュネーヴという町は『フランケンシュタイン』の小説の舞台にもなっているの、町の公園にオブジェ的な「フランケンシュタインの怪物の像」が置かれているほどである。ディオダティ荘は、ジュネーヴの中心から少し外れた、レマン湖を見渡す丘の上に建てられた立派な館であった。現在は個人の所有になっているので、中に入ることができず、開いていた門から中を覗いただけで我慢したが、あの暗い雰囲気包まれた小説が生まれたとは考えにくいほどの、のびやかで明るい、美しいヴィラであった(もっとも執筆当時は雨続きの、陰鬱な天候だったというから、それが作風に影響しているのかもしれない)。

それとは対照的に、ジュネーヴの旧市街 Rue de la Pépissierie にひっそりとたたずむ家が、エリオットが滞在していた家である。エリオットは1849年の父親の葬儀の後、5日を経ずして大陸旅行に旅立った。エリオットは後年ルイスと共に何度かヨーロッパを旅しているが、このときはブレイ家の人々に同行し、旅の最後に一人でジュネーヴに8か月滞在したのだ。どっしりとした石造りの、だが簡素な4階建ての建物であり、入り口にはエリオットの滞在を示すプラークが掲げられていた。個人的な思い込みもあるかもしれないが、『ロモラ』の主人公の家としてエリオットが設定した、フィレンツェのバルディ街に相通ずる、俗世を遮るような雰囲気をもった家であった。

このようにして、2019年は、いろいろな意味で私にとってエリオットの世界が広がる夏となったのである。

George Eliot 2019: International Bicentenary Conference 報告

奥村 真紀

2019年はジョージ・エリオット生誕200周年にあたり、世界各地で記念大会が開かれたが、本国イギリスでも、2019年7月17日(水)～19日(金)にレスター大学において、生誕200周年記念大会が開催され、世界中から研究者が集まった。3日間にわたるプログラムには3回の特別講演と多くの研究発表が生まれ、大変充実したものであった。

初日は Rosemary Ashton 氏の特別講演、“George Eliot and the Difficulty of Coming to Conclusions”で幕を開け、エリオット作品に確固たる結論を求めることができないことがリアリズムの本質であることが論じられた。その後、作品論だけでなく、エリオットと哲学的実践、芸術とデザイン、同時代の作家との関係など、さまざまなテーマの研究発表が続いた。初日の夜にはエンターテインメントとして、*The Mill on the Floss* の舞台化作品の紹介が行われた。

2日目の午前中にも科学とダーウィニズム、エリオットとジェンダーなど興味深い研究発表が行われた。“Approaches to Teaching George Eliot at 200”と題されたシンポジウムでは、大学や生涯教育において、読書経験がそれほど多くないと想定される読者に、*Middlemarch* や *Adam Bede* を使って行った授業の実践報告がなされ、文学教育の在り方を全世界的に考えさせられる機会となった。樋口陽子氏は“Eliot’s Other Writings”のシンポジウムの中で、“Why was I attracted to Marianne Evans’s *Edward Neville*? Marianne Evans and William Coxe’s *Travel Book*”と題し、エリオット作品と Coxe の旅行記の関係について論じられた。

2日目の午後は Gillian Beer 氏、George Levine 氏、Sally Shuttleworth 氏の対談から始まった。40年前のエリオットの没後100周年記念大会と比較して、エリオット研究の裾野が飛躍的に広がったことが言及され、19世紀に書かれたエリオット文学の現代性が改めて論じられた。その後も多くの研究発表がなされたが、“*Romola*: The Reception of the Novel in Japan through its Translations”というシンポジウムにおいては、近代日本における *Romola* の翻訳に焦点を当て、永井容子氏、木下未果子氏、久守和子氏、窪田憲子氏がそれぞれ発表された。永井氏の発表では、開国後、最初に日本に紹介されたエリオット作品が『女学雑誌』に掲載された『ロモラ』の梗概であり、それは開国したばかりの日本の文化に西洋文化を受け入れやすくするためであることが論証された。続いて木下氏が初期の翻訳者であった富永徳磨と賀川豊彦について、キリスト教の伝道師であったことに焦点を当て論じられ、久守氏は富永と賀川の翻訳の比較をされて、前者は要約であり後者は編集であることを論証された。最後に窪田氏はそれに続く『ロモラ』の翻訳を日本における英文学(特に女性作家の作品)の翻訳史の中で論じられた。イギリスで書かれた小説が言語や時代を超えて異文化の中に受容されていく流れを追ったシンポジウムであり、大変興味深いものであった。また、濱奈々恵氏は“*Daniel*

Deronda」のシンポジウムで“Returning Home with a Fortune: Imperial Declines and Births of Cosmopolitans in George Eliot's Later Works”と題して発表され、エリオット作品における“fortune”をキーワードにして、その言葉が後期作品において微妙に異なる意味を持つことを検証された。

最終日は Nancy Henry 氏の講演で始まった。Henry 氏は“George Eliot's Humans and Animals”と題して、ジョナサン・スウィフトにも言及しながら、人間の動物性と動物の人間性について、多くの作品から例を引きながら講演された。その後、最後のシンポジウムの一つ、“George Eliot's 'Recollections' and Her Early Novels: Realism and Nature”では、佐藤エリ氏、石井昌子氏、堀紳介氏が発表された。エリオットの“Recollections”とほかの作品の比較がなされ、世界の在り方の観察とリアリズムの関係について、佐藤氏と石井氏は *Scenes of Clerical Life* を中心に論じられ、その後 Micheal Ormsbee 氏の *Adam Bede* についての発表を挟んで、堀氏が *The Mill on the Floss* について論じられた。フロアからの質問も出て、活発な議論もなされた。

学会の閉会後は George Eliot Fellowship の主催で、Arbury Hall や生家の South Farm などエリオットゆかりの地を巡るツアーが開催された。あいにくの空模様となったが、多くの研究者が参加し、作家の生涯や作品への思いを深めた。

今回の学会には、英米の研究者のみならず、多くの日本人研究者も参加し、研究発表もなされた。それぞれのシンポジウムのテーマは非常に幅広く学際的で、個々の作品研究、個人作家研究を超える広がりが見られた。教育現場への活用であったり、インターネットを使ったデータベースの開発も含め、世界中のエリオット研究者がこの機会にさまざまな問題意識を共有し、つながりを深められたことはエリオット研究の今日性を象徴しているように思われ、意義深い。生誕 200 年の記念すべき年を超え、さらにエリオットの作品の持つ可能性が広がっていくことが実感される大会であった。

日本ジョージ・エリオット協会 第 23 回全国大会報告記

谷 綾子

2019 年 12 月 14 日（土）、松蔭大学において、第 23 回日本ジョージ・エリオット協会全国大会が開催された。矢野奈々氏の総合司会のもと、石上七鞆氏による開会の辞及び開催校代表挨拶が述べられ、その後研究発表が行われた。

最初に福永信哲氏の司会のもと、永井容子氏による「George Eliot 2019: International Bicentenary Conference の報告とこれからのエリオット研究」と題した発表が行われた。本発表は、2019 年 7 月 17 日から 3 日間開催されたジョージ・エリオットの生誕 200 周年を記念した国際大会 George Eliot 2019: An International Bicentenary Conference（於 University of Leicester）の内容を概説したものである。1 日目の Rosemary Ashton 氏の発表では、エリオット作品におけるリアリズムの傾倒について語られた。オースティンやディケンズとは違い、エリオットは作品のラストにおいて、登場人物に褒美や罰を与えず、はっきりとした結論をださない。その funny と serious が共存する作品の終わり方こそ、エリオットを真のリアリストたらしめているのである。2 日目の発表では、Gillian Beer 氏、George Levine 氏、Sally Shuttleworth 氏による議論が交わされた。3 名は揃って、エリオットほど文学以外の学会で取り上げられている作家はおらず、多方面の分野からエリオット作品が論じられていることを語り、エリオットが作品で提示しているテーマが文学という枠を越えて、現代の時事問題（例えば Brexit など）にも通じるものだという指摘がなされ、エリオットの普遍性に改めて気づく機会を得た。3 日目は Nancy Henry 氏によるエリオットと動物学の研究が発表された。エリオット作品において人間の中に潜む動物性は重要な論点であり、スウィフトの『ガリバー旅行記』のエリオットへの影響が指摘された。また、本大会は、インターネットを介しての学術交流と情報発信の在り方を考える好機となった。George Eliot Archive (<https://georgeeliotarchive.org>) もその一例である。

次に田中淑子氏の司会のもと、新野緑氏による「ジョージ・エリオットと〈一人称語り〉—『エイモス・バートン師の悲運』を中心に」と題した発表が行われた。エリオットにおける全知の語りの介入の多さはよく指摘される場所であるが、「エイモス・バートン師の悲運」では、神のように超然と登場人物を見下ろす全知の語りとは対照的に登場人物と同じ地点に立つ身体性を持つ一人称語りが入り込んでいる。他者との差別化を通して一部のひととの結束を強めるゴシップと他者との異質性を前提として人と人との絆を結ぶシンパシーを軸に物語は展開し、一人称の語り手は語りを通して読者と共感でつながろうとする姿勢を示している。エリオットの一人称語りの特異性の中に、全知の視点がもはや存在しない不確定な世界を基盤にすえた後のジェームズやウルフに通じるモダニスト的世界観を見出すことができる。

昼食休憩後、福永信哲会長の挨拶があり、その後、小野ゆき子氏の司会により 2019 年度総会が開かれた。総会では、2019 年度活動報告、2018 年度決算報告および 2020 年度予算案提示、『ジョージ・エリオット研究』英語論文特集号の編集報告と学会誌の一般公開についての提案、『ニューズレター』第 23 号編集報告、ホームページ担当委員からの報告、『フロス河の水車場』英語教科書出版についての報告、第 24 回全国大会予告（2020 年 12 月 12 日（土）、津田塾大学）、

事務局および事務局長の変更連絡があった。また、会長より他学会と共同で運営するヴィクトリア朝合同研究会の創設の案内があった。

続いてシンポジウム「ジョージ・エリオットと旅—“Recollections”を読む」に移った。冒頭、司会講師の富田成子氏から講師の紹介が行われた。ヴィクトリア朝はトーマス・クックの活躍により観光業が盛んになった時代ではあったがそれでも旅は苦役であった。それにもかかわらずエリオットとルイスが欧州旅行を繰り返したのは彼らの専門の研究のためであり、“Recollections”はその成果を記したものである。旅の体験が如何に作品に具現化されたか、谷田恵司氏、富田成子氏、閑田朋子氏、田村真奈美氏がそれぞれの論考を発表した。谷田氏は“*The Lifted Veil*” (1859) において主人公がヨーロッパから帰国する際の経路が、エリオット自身がこの作品発表の前年にルイスとともに旅したところであることを指摘し、エリオットが旅の経験を知的創作物へと昇華させた論じた。富田氏はエリオットがローマを訪れた時に感じた失望を、ドロシアが廃墟ローマとその廃墟の断片性を内面化した夫カソーボンに対する失望に投影して描いたとし、異国のハネムーンにて夫という身近な他者との接触を通して初めて自己を内省し現実に覚醒していくドロシアの内面的成長についての知見を述べた。閑田氏は“*Recollections of Ilfracombe 1856*”を基に、当時大流行した博物学の観点から観察・分類を信条とするリアリズム作家の誕生について、田村氏は“*Recollections of Italy 1860*”をグランド・ツアーの観点から、またディケンズ、F・トロロープの『イタリア旅行記』との比較を通して、エリオットの旅の特質について論じた。

プログラムの終盤には、大嶋浩氏の司会により、深澤俊氏の『ダニエル・デロンダ』を超えて」と題する特別公演が行われた。音楽への言及が多い『ダニエル・デロンダ』には、グウェンドレンを中心としたテーマと、マイラたちユダヤ人を中心としたテーマとの二つの主題があって、この作品は、音楽のソナタ形式のようにバランスを取って進みそうだったが、グウェンドレンがしっかりと個性で挫折を乗り越えて生き抜くのにたいして、デロンダ、マイラたちユダヤ人の生き方に方向性が描かれても、その方向に歩み出すところまでは行っていない。19世紀の国民国家の勢いは急激に衰え、20世紀になってゲマインシャフト共通の基盤や精神が失われてしまった。これはエリオットにとって予想すらできないことだっただろうが、書けない状況のために作品のバランスにずれが生じてしまう。その状況のなかであっても、グウェンドレンの生き方に読者の共感が湧くのは、エリオットの感性の見事さであろう。

講演後は田中淑子氏の閉会の辞をもって、盛会のうちに第23回日本ジョージ・エリオット協会全国大会の幕は閉じた。この後、同会場のティアラホールに場所を移して懇親会が開かれ、会員相互の親睦を深める場となった。

日本ジョージ・エリオット協会 第23回全国大会シンポジウム ジョージ・エリオットと旅—‘Recollections’を読む

富田 成子

今回のシンポジウムは、ジョージ・エリオットの紀行エッセイ・シリーズ‘Recollections’を主題として取り上げた。エリオットは実践した多くの旅の中から6つを選び、当時流行の旅行記を念頭に‘Recollections’のtitleを付して旅の体験や感想をエッセイとして綴っている。この連作が執筆された1854～1860年は、評論活動から小説家への転身、相次ぐ初期小説群の旺盛な創作、高い評価による文壇での地位と人気の確立と、エリオットの執筆活動が劇的に成長・進化した時期である。一人称で綴られる‘Recollections’にはエリオットの率直な思いが吐露され、professionalな目的を抱いて臨んだ旅の実態について、また、現地の知識人や芸術家との交流や美術・音楽・演劇の鑑賞といった異文化探訪の体験と感動が生き生きと伝わってきて興味深い。しかし、元来privateな執筆物である‘Recollections’は、長い間6冊のノートのまま図書館に保管され、1998年の*Journals*の出版まで活字化されなかったため、国内外ともに殆ど読まれていないのが実状である。

今回はこの未踏の分野に光を当て、連作‘Recollections’を手掛かりに、①夫々の旅の体験が作品に如何に具現化されたか、②ヴィクトリア朝文化の背景から見た旅の実態と成果、の二点についてパネリスト各氏に検討して頂いた。最初に司会の富田が、‘Recollections’に記された旅の特長、旅を契機に生まれた執筆作品・業績などを解説した後、研究発表に移り、谷田氏には‘*Recollections of our journey from Munich to Dresden*’と‘*The Lifted Veil*’との関わりについて、富田は‘*Recollections of Italy 1860*’と‘*Middlemarch* (19～22章)’との投影関係について、閑田氏には‘*Recollections of Ilfracombe 1856*’を基に、当時大流行した博物学の観点から観察・分類を信条とするリアリズム作家誕生の経緯について、田村氏には‘*Recollections of Italy 1860*’をグランド・ツアーの観点から、またディケンズ、F・トロロープの『イタリア旅行記』との比較を通して、エリオットの旅の特質について論じて頂いた。発表要旨は以下の通りである。

‘The Lifted Veil’とジョージ・エリオットの旅

……(谷田 恵司)

‘The Lifted Veil’を旅と輸血という二つの点から考える。主人公がヨーロッパから帰国する際の経路は、エリオット自身がこの作品発表の前年にルイスとともに旅したところである。エリオットはヨーロッパからイギリスへという空間移動を主題の展開に沿わせて作品世界を構成した。またルイスの生理学への関心が重要な要素を提供した。この作品には未来予知、他者の心理の読心、そして輸血による死者の蘇生という三つの超自然的、疑似科学的な物語装置が使われている。前者二つは19世紀半ばの段階では、まだ正統的な科学と異端的疑似科学との境界に位置していた。一方、輸血実験は150年の暗黒時代を経てやっと再開され、医学界で一定の評価を得ていた。このような時代背景の中で描かれた医学的実験としての輸血は、現在進行中の先端医療研究を取り入れた、きわめて同時代性を帯びた物語装置であった。

この作品にエリオットのルイスとの共同生活の影響を見ることができる。第一に、ともに歩いたヨーロッパを、リアリズムを外れた創作方法の実験の舞台とすることで、知的探求の旅の成果を示した。またルイスの自由な科学的精神への応答を、科学と人間性の交わる輸血の場面で表したと考えることができる。

‘Recollections of Italy 1860’と *Middlemarch* (19-22章)

……(富田 成子)

Middlemarch は1860年のイタリアの旅より10年後に執筆されるが、その第二部19～22章に於いて舞台は平凡な地方都市ミドルマーチから一気に歴史の都ローマへと転じる。*The Mill on the Floss* を書き終え、創作上の新境地を求めて臨んだイタリアの旅が、この四章にどのように具現化しているかを次の二点より検討した。(1) 期待と大きく異なるローマに愕然とするエリオットの衝撃は、カソーボンに託した夢の崩壊に動揺するドロシアの心象風景として、エリオット通例のリアリズムとは対極の、死・過去・廃墟のイメージ溢れる異形のローマ像へと結晶している。また、ファルネジーナ荘で鑑賞したラファエロのフレスコ画 *Cupid and Psyche* による失望体験を、カソーボンの造型に援用して、凡庸で感性の枯渇した彼の特質を炙り出した。(2) 当時ローマの美術界に改革運動を巻き起こしていたナザレ派に注目し、その“vigorous enthusiasm”を体現するナウマンの造型には、ローマで出会い深く魅了されたナザレ派の主導者 J.F. オーバーベックが部分的に投影することを論じた。

イルフラクームでの体験と博物学

……(関田 朋子)

メアリアン・エヴァンズがジョージ・ヘンリー・ルイスとイングランド南西部の海岸保養地イルフラクームに一月半ほど滞在したのは、1856年のことであった。本発表は、‘*Recollections of Ilfracombe 1856*’を手掛かりにして、小説家ジョージ・エリオットのキャリアのなかに、このイルフラクームの旅を位置づけることを目的とした。当時イルフラクームは巷で流行の「海辺の博物学」のメッカであり、二人も同地で水生生物研究のフィールド・ワークに勤しんでいる。同時にメアリアンは書評 *The Natural History of German Life* を執筆し、生物を実際に観察して分類するという博物学の手法を、人間を対象にする場合にも敷衍し、これによってステレオタイプ化した全体的概念に囚われることなく個々のリアルな存在に迫ることを提唱している。約3カ月後に彼女は処女小説 *The Sad Fortunes of Reverend Amos Burton* の執筆を開始し、ジョージ・エリオットというペン・ネームを初めて用いるのだが、最後の著作 *Impressions of Theophrastus Such* に至るまで、観察・分類という博物学の鉄則に則って、人間とその生活・社会・文化を描き続ける。以上について考察を行ったうえで本発表は、イルフラクームでの日々はジャーナリストとしてのメアリアンがリアリズムの小説家ジョージ・エリオットに生まれ変わる分水嶺に当たると結論づけた。

イタリア—ジョージ・エリオットのグランド・ツアー

……(田村 真奈美)

19世紀、ヨーロッパ大陸への旅はアッパー・クラスのみならず、経済的に余裕があるミドル・クラスの英国人にも可能なものとなってきていた。旅が大衆化するにつれて、その性質も変わってくる。また、数多くの旅行記やガイドブックが刊行され、人々の旅への思いは一層掻き立てられた。本発表ではそのような背景の中にエリオットの‘*Recollections of Italy 1860*’を置き、彼女のイタリア旅行の特質を浮かび上がらせようと試みた。

‘*Recollections*’は出版を目指したものではなく、旅の短い記録であるため、他の旅行記との比較は難しいところもあるが、それでも先行する旅行記やガイドブックの影響が感じられる部分もある。また、ほぼ同時代の作家(ディケンズやF.トロロープ)の旅行記と比べると、作家としての特質の違いが明確になる。今回取り上げた旅行記の中で、おそらく最もエリオットの旅の姿勢に近いのは *Italienische Reise* (『イタリア紀行』1816-17; ただし旅自体は1786-88)に見られるゲーテの旅の姿勢ではないだろうか。ゲーテにとってイタリアは再生の地となったのだが、エリオットにとってもこのイタリアの旅は新たな生の始まりを告げるものと捉えられているのである。

シンポジウム要旨

F.R. Leavis は、その著 *The Great Tradition* において、エリオットをオースティンの伝統に連なるものとして、エリオットに対するオースティンの「深遠なる重要性を帯びた影響」を示唆しているが、示唆に止めている。偉大な独創的作家間の影響を明確にすることなど困難極まりないというのが彼の理由だが、エリオットとオースティンはともに英文学の「偉大な伝統」上にあり、19 世紀を代表する 2 作家の関係性の謎には、今も私たちを魅惑してやまないものがある。本シンポジウムは、エリオットとオースティン、2 つの協会の共催であり、各発題の着眼点も以下のように多岐にわたる。

川津氏は、Wollstonecraft の *A Vindication of the Rights of Woman* を介在させて、女性の教育と生活の資の獲得のありようを、*Emma* と *Middlemarch* の家庭教師の描写において比較・検討し、また土井氏は、オースティンとエリオットの少女期の創作に焦点をあて、後年の小説作品にそれらがどのように結びついていくかを考える。そして永井氏は 2 人の女性作家に共通してみられる匿名性が「視点」の問題と密接に関係していることを指摘して、両者の接点を「視点」という観点から考察し、また新野氏はヒロインをはじめ登場人物たちの様々なく見誤り>をテーマに、オースティン作品がエリオットの創作活動にどのような影響を与えたのかを探る。

それぞれの協会に属する講師のこうした自由で多彩な切口によって、エリオットとオースティンは、ときに激しく、またゆるやかに交差しながら自らを浮き彫りにしていくだろう。フロアも巻き込んでの活発な議論のうちに、これら 2 人の作家間に文学的・化学反応のようなものがさまざまに生まれ出てくれればと願っている。(惣谷美智子)

第 24 回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、廣野由美子先生(京都大学教授)を講師としてお招きします。先生は 19 世紀イギリス小説をご専門とし、これまでに『批評理論入門』(中公新書)、『深読みジェイン・オースティン』(NHK ブックス)、『謎解き「嵐が丘」』(松籟社)などのご著書、および、ティム・ドリン著『ジョージ・エリオット』(彩流社)、『ミドルマーチ』(光文社古典新訳文庫、全 4 巻順次刊行中)などの翻訳書を出版されました。特別講演では「ジョージ・エリオットはジェイン・オースティンから何を受け継いだのか?」という問題について、〈分別〉と〈多感〉をキーワードに論じていただく予定です。『ミドルマーチ』と『分別と多感』の比較考察、先生が両作家との出会いから文学研究を始めた経緯、『ミドルマーチ』の翻訳作業をとおして発見したことなども披露いただけるようです。皆様、奮ってご参加ください。

第 24 回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 2~3 人(予定)

応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7月25日

発表時間： 30 分(発表 25 分、質疑応答 5 分) 時間厳守でお願いいたします。

レジュメ： ワープロ A4 版で、約 400 字程度。発表題目には、英文名も添えてください。

※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。

宛先： 〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

日本ジョージ・エリオット協会事務局/E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

2021 年度『ジョージ・エリオット研究』第 23 号への投稿論文募集

2021 年 11 月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第 23 号の投稿論文の締め切りは 2021 年 4 月 1 日(木) 厳守です。奮ってご応募ください。投稿規定は、役員名簿の下に掲載されております。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページからダウンロードすることもできます(<http://www.g-eliot.jp/ronshyu.htm>)。論文の他に書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の大嶋浩先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員	7,000 円 (国内会費 5,000 円と英国本部会費 2,000 円)
英国本部に登録された終身会員	5,000 円 (国内会費のみ)
学生会員 (大学院生、学部生など)	2,000 円 (本部会費を含む)

振込先 (郵便振替口座) : 00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

* 郵便局内にある振込用紙、またはゆうちょダイレクトをご利用ください。

(本年度より、協会から振込用紙をお送りすることは見合わせております)

* 振り込みの際にしましての手数料はご負担いただいております。

なお、事務処理の都合上、9月末までにお振込をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。ご承知の通り、本協会は英国ジョージ・エリオット・フェローシップの支部をかねており、毎年1月に英国本部に会費を送金しております。会費納入が年を越しますと、本部への送金に間に合わず、本部からの郵送物が受け取れなくなります。また、退会につきましてもお申し出がない限りは、遡って未納分の会費を納入していただくこととなっておりますので、くれぐれもご注意ください。

新入会員の確保について

現在、本協会は、一般会員 73 名、終身会員 13 名、学生会員 2 名、合計 88 名となっております。年々数名の会員が加入される一方で、退会される会員もおられ、全体として会員数は漸減傾向にあります。100 名を切る状態が続きますと、日本学術会議から協力学術研究団体としての認定を受けられなくなる可能性がありますので、会員の皆様におかれましては、新入会員確保にご協力を賜りますようお願いいたします。この問題に関するご意見等がございましたら、事務局までお知らせください。

事務局夏季閉鎖のお知らせ

例年にならい、夏季休暇のため 8 月 1 日から 8 月 31 日まで、事務局を閉鎖いたします。緊急のご連絡は、事務局中島正太のメールアドレス (nakajima@kgw.bunri-u.ac.jp) 宛てにお願いいたします。

☞新刊書等のご案内☜

- ★ 奥村真紀、清水伊津代 訳「サイラス・マーナー—ラヴィロウの織工」、 「ジューバルの伝説」 『サイラス・マーナー—ラヴィロウの織工 付 ジューバルの伝』 (ジョージ・エリオット全集 4、2019.08.09) 彩流社、243 pp. ; 「サイラス・マーナー—ラヴィロウの織工」 (奥村真紀訳、pp. 1-196)、 『「サイラス・マーナー」解説』 (内田能嗣、pp. 197-208)、 「ジューバルの伝説」 (pp. 209-34)、 『「ジューバルの伝説」解説』 (清水伊津代、pp. 235-43)
- ★ 小尾英佐 訳『サイラス・マーナー』 (光文社古典新訳文庫) (光文社、2019.09.20) 383 pp. 「サイラス・マーナー」 (「第一部」、「第二部」、「結び」、pp. 5-349)、「解説」 (富田成子、pp. 350-73)、「ジョージ・エリオット年譜」 (pp. 374-79)、「訳者あとがき」 (pp. 380-83)
- ★ 廣野由美子 訳『ミドルマーチ 2』 (光文社古典新訳文庫) (光文社、2019.11.20) 475 pp. 「第3部 死を待ちながら」 (pp. 7-201)、「第4部 三つの愛の問題」 (pp. 204-433)、「読書ガイド」 (pp. 434-75)
- ★ 荻野昌利 『ミドルマーチ—ある田園生活の研究 前編』 (大阪教育図書、2020.03.20) vi+649 pp. 「はじめに」 (pp. iii-iv)、「目次」 (pp. v-vi)、「プレリュード (序章)」 (pp. 1-6)、「第一巻」～「第四巻」 (pp. 7-649)
- ★ 荻野昌利 『ミドルマーチ—ある田園生活の研究 後編』 (大阪教育図書、2020.03.20) iv+642 pp. 「目次」 (pp. iii-iv)、「第五巻」～「第八巻」 (pp. 1-606)、「フィナーレ (終章)」 (pp. 607-20)、「解説」 (pp. 621-32)、「作中主要人

